

田島明子（著）

日本における作業療法の現代史 —対象者の「存在を肯定する」作業療法学の構築に向けて

京 極 真
(吉備国際大学, 作業療法士)



著者は、『私的所有論』等の大著で名高い立岩真也氏のもとで研鑽を積み、2011年（平成23年）に博士号を授与された新進気鋭の作業療法学者である。本書は、著者の博士論文に加筆・修正を加えたものであり、非常に刺激的な論考を膨大な先行研究とともに展開している。読者は著者の実力に驚嘆するとともに、知的冒険に血湧き肉躍る体験をするだろうと思う。

本書の独創と意義は、作業療法の現代史の検討から、この領域が暗黙のうちに依拠する前提と矛盾を浮きぼりにしたうえで、「存在の肯定」という命題を提出しているところにある、と考えられる。この命題は、従来の作業療法が対象者の「適応」を目指すあまり、対象者の「できること」と対象者の「価値」が結びついてしまい、対象者が存在すること自体の価値を劣位に置いてしまうことに対する反省から導出されている（第1章、第6章）。著者は、第2～5章の作業療法現代史の検討を通して、対象者の存在価値が劣位に置

かれる理路を丹念に議論している。

では著者が言う「存在の肯定」とは何か。著者はこの命題の意味を、本書全体を通して多角的に論じている。したがって命題の全体像は、読者一人ひとりに確認してもらいたいが、あえて評者なりにポイントを示せば、第6章の表題で「存在価値と能力価値の倒置のない作業療法学のあり様を目指して」と端的に示されていることからわかるように、要するにこれは“対象者が存在する価値は、対象者の能力の価値に先立つ”という意味であると言えよう。

つまり本書でいう「存在を肯定する」作業療法学とは、対象者の存在（対象者が生きているということ）に価値の始発点に置き、そこから理論、評価、介入等の一切を展開していくものである、と理解できる。こう書くとあたり前のように聞こえるかもしれない。しかし本書で論証しているように、現代作業療法を代表する理論（人間作業モデル、カナダ作業遂行モ

デル等）が存在価値と能力価値の倒置に陥っていることを踏まえ、この命題がもつ独創性と重要性が理解できると思う。既存の作業療法学やリハビリテーション学において、「存在の肯定」はあたり前ではないのだ。

最後に本書の読み方を説明すると、この書評を読み「存在の肯定」という命題が理解できなかった方は、著者が本書の全体像を示している序論を読んでから第2～5章を読み、そのうえで、第1章と第6章を読むと理解しやすいかもしれない。他方、すんなり理解できた人は、最初から最後まで通読するほうが理解しやすいと思う。

既存の価値観に挑戦する本書は、多くの読者にインスピレーションを与え、次世代を担うすべてのOT、作業療法学生に読んでほしい。

A5判 272頁 3,000円＋税
生活書院 刊
☎ 03-3226-1203